森林レンジャーあきる野新聞

Vol.52　2014年10月号
発行：森林レンジャーあきる野

あきる野の森には、ニホンジカなど、大型の哺乳類が生活しており、その痕跡を残します。ツキノワグマやニホンジカは、樹木の表皮をはいで、樹皮下の形成層（生きている細胞）を食べます。一般的には、森林被害（林業被害）と言われています。しかし、森を生活の場にしている動物たちは、ただ樹木に傷をつけ、ひどいときには木を枯らしますが、本当に森を食べつくすだけでしょうか？

林業の被害を別にすれば、森が森として存続して行く為には、老木が枯れて、森の中に日が射すと、次の世代を担う若木が育ちます。森で暮らす動物たちは、森が森として成り立って行く為に、木を枯らして、新しい若木が育つように森の手入れをしているのかもしれません。

←ニホンジカの食べ跡（リョウブ）
V字型に左右に分かれて前歯で形成層を剥ぎ取る形になる。

→クマ剥ぎ（スギ）
右下の写真は、クマが立ち上がって前歯で上下に形成層をしごき取るため、前歯の跡が残る。

←ニホンジカの角研ぎ痕（ヒノキ）
6月に新しい角が生えた後、10月の交尾期に♂同士で喧嘩をするために、角を木の幹に擦り付けて角を研ぐ行為で、夏にたくさん見られます。クマ剥ぎとよく似ていますが、角の先端で斜めに傷がついていると角研ぎと考えて間違いないです。

ニホンジカが森を枯らす？ホント！ウソ！

奥多摩では、柵によって林床の再生試験中

シカの食害が山（森）を荒らすと言われます。森の地面に広がる草や低灌木が食べつくされて、裸地化して雨などで表土が流れて、ひどくなると山体崩壊と言われるほど浸食が進みます。浸食が進むと、豊かな表土を失うだけでなく、土に蓄えられていた様々な種子も流されます。すると、空いた場所になかなか次の世代の木々や草が育つことができません。はげ山に緑を取り戻すのは、とても大変です。足尾銅山跡地、日光いろは坂から見える裸地化した斜面、雲取山の山頂周辺など、一度裸地化した所ではなかなか緑豊かな景観に復元できません。

あきる野でも、ニホンジカの大きな群れが住む所では、左上の写真のように裸地化が進んでいるところがごく一部にあります。

一方で、林床にササが高く茂っている場所もあります。周りのコナラからドングリが落ちても、ササ藪の中では大きく育つことが難しいと言われます。（樹木の更新はまったく無いと言う意見もあります。）下の写真は、ある程度シカが下草を食べている場所です。こちらも茂っているのはササですが、足のくるぶしほどの草丈で、次の世代のコナラなどの幼木も見ることができます。シカがほどほどに下草を刈りこんでくれることで、次世代の苗木が育ち、森が若返ります。

最近、生物多様性という言葉をよく聞きます。シカによる森林被害があるから、シカは減らした方が良いという意見を多く耳にします。しかし、シカがいないと下草が繁茂して、周りの木々（高木）の苗木が育つことができません。それは、森の木が枯れても、次の森を支える木が育たないことになります。シカが下草を管理すれば、不嗜好植物が繁茂する問題はありますが、柵で囲うことなく次世代が育つ林床が保たれます。これには、前提として、そこで暮らすシカの生息数が適正であることが必要です。森の木を枯らすシカですが、シカがいないと森の若返りが難しいことになります。林業被害を別にすれば、このYESでもなく、NOでもないあいまいさ、分かりにくさが「生物多様性」の本質なのかと考えながら、森の中を歩いています。

（杉野二郎）